

昭和四十九年十一月十八日 ご講演

「未知への挑戦」

理学博士・日本生産性本部理事 西堀栄二郎先生

皆さん今日は。私は山登りが好きで、日本山岳会の副会長を務めたこともあります。またこちらの細川護立侯には、以前、まだご健在の時分、お目にかかつてご厄介になったことがあります。

今日の演題は「未知への挑戦」ということでありますが、これからの諸君はいろんな面で未知を開拓して頂かなければならないし、青年というものは、未知を開発するというひとつの大きな夢を持ってもらわねばならないので、こういう演題にしたわけです。自分のことばかり申し上げて誠に申し訳ないけれども、これから申し上げることは、私自身の体験によるものであって、それは、いま演題にあるように、常に未知への挑戦であります。それは必ずしも地理的な未知へ挑戦するということではありません。また諸君に、ヒマラヤへ行けの、南極へ行けのなどということを上申し上げるのではなく、ありまして、すべての分野において、科学であろうと、技術であろうと、文学であろうと、どんな方面に向かわれようと、諸君の前

には常に未知が横たわっているのです。その未知を避けて通ってはいけません。その未知を自らの手で切り開いていかなければならないのです。それは、地理的な探検等というものは、一番目に見えて分かり易いのですが、しかし、

私が東海村において原子力研究所を設立いたしましたときも、やはりあれも、未知の世界であります。そのとき私は長靴をはいてあの松林を切り開いて、あそこに建設いたしました。ちょうど、私が南極から帰ってきてすぐでありまして、すでに私以外の先生方は半年以上も前からそれに携わっていられるのですけれども、誰一人まだ現地に赴任された方はありませんでした。皆、東京の本部に巣くっておられた。私は南極から帰ってくるなり、「なんですか、あなた方は。現地に乗りこまないんですか。あなた方がぐずぐずしていらつしやるなら、私一足お先に赴任します」といって、家族をつれて東海村に赴任しようとした。そしたら、

そのほかの理事の先生方は、「へへえ、そりゃ南極よりは住み易いですね」というご挨拶が

りました。私は実に吹きだしたいほどの思いでありました。つまり、ほかの方は何事も新しいことをみずから率先してやろうとする意欲がなかったように見えるのです。

まあ、そういうわけで、あの東海村も立派な研究所になりました。それから二期、私は理事を務め、それから後、今度は原子力船「むつ」、いま新聞に載っておる、あの「むつ」の建造にかかりました。これも、まだ当時としては、誰もやった人もないことだし、いろいろ新しいことをやろうと思えば、必ずそこに困難がつかまといます。

南極にまいりましたときも、私は第一回、最初のときでございまして、しかも学問ではなく、私の場合は兵站部を引き受けていたわけでありまして、ほんとうに何も分からなかったのです。例えば、建築の先生に、「南極で使う家をつくって下さい」と、こういったら、その先生は、「そりゃ西堀さん、どういってところに建てるのですか。雪の上ですか、氷の上ですか」と、こういうられるのです。「さあ、それも分か

りません。行ってみなければ分かりません」「岩の上ですか」「さあ、それも分かりませんね。何も分かりません」「そんな分からないところに家を建てろなんていったって、それは無理だ」と、建築の先生はおっしゃいました。「しかし、私はどこに建てるか分からないものを設計してもらわねばならない。どこでも建つものをこしらえてもらえば、それでいいのです。あなたにお願いしたのは、そういうことをお願いしたのであって、誰でもできることなら、何もあなたみたいなおえらい先生に頼みませんよ。こう申しました。で、まあ大変なことになってきたなあ、とその先生は思ったのでしよう。「では条件を聞くけれど、一体どのくらいまで気温は下がるのだ」「そいつは分かりません。まあ、マイナス六〇度ぐらいまでは下がりますね」「それは大変だよ。君、マイナス六〇度といったら。それなら風はどのくらい吹くのだ」「さあ、そいつは分からないけれど、まあ六〇メートルぐらい吹きますでしょうね。室戸台風（一九三四年）がそのくらいだった、そのくらいでしょう。「屋根の上に一体どのくらい雪が積もるのだ」「さあ、そいつは分からないけど、まあ一メートルぐらい積もるでしょうね」。いいかげんな話です。「そんなことしたら、もう大変な家になるぞ。誰が一体それを運ぶのだ」「それは知りません」「それはよほど軽くしないと、

そんな弱い奴にかつがしたら、どうせのたれ死にしてしまう。よほど軽くせねばならない。おまけに誰が建てるのだ」「私たちが建てるのだ」「それはよほど馬鹿でもちよんでも建てられるようにしなければいけない」。そういうのをフル・プルーフ（※使用者側の誤った操作に対応し、誤りの修正などを行う機能のこと）とこのことです。防水のことをウォーター・プルーフというのですからね。あれは水をはじくのです。フル・プルーフというのは馬鹿をはじくものですからね。それを日本語に訳して「馬鹿よけ」というのです。馬鹿よけにつくっておかねばなりません。「それは大変だよ」「やあ、大変なことは分かっている」。とうとう設計してちゃんとつくってくれたら、坪当たり天皇陛下の家より高くつきましたね。

で、実際向こうに行ってみたら、そこは岩の上でした。それは地盤が一番固いですね。一番簡単です。のみならず風はどんなに吹くかと思っていたら、なるほど風は吹きはするけれど、間もなく雪が全部ふちをかこってくれるから、風は直接当たらない。屋根の上には一メートル積もるなんていっていたけれど、一ミリも積もらない。それは南極の雪というのは、気温が低くて粘性が全然ないから、砂と同じことです。少し風が吹いたら、ふらっと飛んじやう。屋根の上には全然雪は積もらない。最後の雪みたい

な、あんなねばっこい、湿っぽい雪ですと、くつつきますから、だからいくらでも積もるんです。こっちは、まるで砂みたい。

万事そういうわけで、なんにも不自由はありませんでした。みんなそれは杞憂というか、取り越し苦労というか、最悪の条件を考えただけのことです。しかし、何か新しいことをやろうと思えば、必ずそういう最悪の条件を常に考えておかねばならないわけです。

イギリスという国は海賊だとかいろいろなことをいう人がありますけれども、ある意味で私は非常に尊敬している国です。かつて七つの海を征服してあのユニオン・ジャックの旗を立てて歩いた。どこの島にも、イギリスの領土が一杯あります。それは彼らのいわゆる探検的精神がそうさせた。誰も行ったことのないところを、丹念に探し歩いて島をみつけると、そこに自分の国の旗を立てる。悪くいう人もいるけれども、私はイギリスのあの不屈の魂と、常に未知に挑戦しようとするその意欲とに敬服するのです。世界で一番高いあのエベレストにも登れたのは、イギリス人です。一番先に南極点に到達したのは、皆さんご承知のノルウェーのアムンゼンですけれども、しかしその前の年、イギリスのシヤクルトンがもう南極点のすぐそばまで行っていながら、天候の悪化のために引きかえしてきて、無事イギリスに帰りました。シヤク

ルトンは引きかえす勇気をもっていたのですね。で、その意志を継いで、その雪辱戦をやるつもりで、スコットが出かけました。ちょうどアムンゼンと一緒に向こうに行ったことになるわけですね。で、スコットは非常な困難をいたしました。それはまず彼があんまり犬を持つていかなかったことです。だがアムンゼンは犬をたくさん持つていった。で、スコットは雪上車みたいな、自動車を改造したものをつくって、それで行こうとした。けどものの方は馬を使う。ところがその雪上車も動かない。で、馬も駄目になってしまふ。少し持つていった犬も駄目。結局、スコットは、自分の肩で櫓(そり)をひっぱって、非常な苦勞をして南極点に到達してみた。その一か月前にすでにアムンゼンのテントがあった。で、スコットは大変ガツカリしたわけです。それでもくじけず、まだその魂をもつて、櫓をひっぱって帰ってきた。その途中、もうほんの僅か行けば食料品などが置いてあるというところまでできていながら、全員風のために死んでしまった。これは『世界最悪の旅』という本に書いてあります。これは非常に有名な本ですから、読んでおかれると思います。

これを見てもお分かりのように、イギリス人は、シャクルトンが出かけていき、そしてスコットが後を継いでやっていって、不幸にして二

人とも栄冠を運のよいアムンゼンにとられてはしまったけれども、それは大した業績ですね。で、このようにイギリス人というものは大変な探検的精神を持っています。未知の世界に挑むだけの力量を持っています。しかし、それは単にそういう地理的な探検ということだけに終わっていないところに、私はさらにイギリスを尊敬するゆえんがある。それは、技術の面における未知の開拓、未知への挑戦ということを立派にやっている。いくつものごいますけれども、時間の都合もあるからその中のひとつだけ申しませう。

コールダーホール(Calder Hall)型の原子炉というのがあります。そのコールダーホール型の原子炉というのは、東海村の日本原子力発電株式会社が運転しております。日本に最初にとってきた原子炉です。この原子炉というものは、イギリスがほんとうにエネルギーほしさに開発したものです。第一回目のスエズ運河の封鎖によつて石油がなくなつた。それがために、これから先はどうしても原子力エネルギーに頼るほかはないのだということから、早速原子炉をこしらへることになつたのですが、しかし、一番安物の、一番ありふれた原料でつくるしか、そのときには手がなかつた。アメリカとソビエットは、まだ急いで原子炉を必要としないから、両方とも、天然ウラニウムの中に約〇・七%入

っているウラニウム²³⁵というのを濃縮して、天然には〇・七%しか含まれていないのを一〇%、二〇%というふうに濃くして使うことを考えてやる。しかし、コールダーホール型の原子炉は、天然の薄いままのウラニウムを使ってやっているわけです。この原子力のエネルギー、すなわち核分裂反応によつて出てくるエネルギーというものが枯渇した石油、あるいは石炭といった化石燃料に――このウラニウムというものが天然の中に残されていたということは、実にわれわれ人類としては有難いことでありませう。もうこのほかに核分裂を起こす物質は自然にはないのです。神様がこれだけ(〇・七%だけでも)残しておいて下さつたということだけは、ほんとうに感謝しなければならぬことだと、私は思いました。この天然ウラニウムというものを、そのままイギリスは使おうとした。で、これに中性子が当たると、ものすごいエネルギーと同時にひとつ以上の別のとても速度の速い中性子が出てくるわけです。この新しく出てきた中性子は、スピードが遅くなるほど次のウラニウム²³⁵によく吸収されて効果的なのです。つまり、できたてのほやほやの中性子ですと、これは非常にスピードが速いために、反応しようと思つているうちに突き抜けてしまふから、スピードが遅ければ、ゆっくりと反応して、よく連鎖反応がおこるのです。したがつ

て、その速いやつを遅くするための減速材が必要で、この減速材というものを何を使うかというところが、また原子炉の設計の上で非常に大事で、カナダの原子炉（カナダ型加圧重水炉）では重たい水（重水）を減速材に使います。これは普通の水の中にほんのちよっぴり入っているわけで、これまた濃縮するのに大変なエネルギーと費用がいるわけです。だから、ウランニウム²³⁵を濃縮するか、あるいは重たい水を濃縮するか、どちらかということになるわけです。

イギリスはこんな贅沢なものを使わないで、もっともありふれたグラファイト（カーボン／炭素／黒鉛）を使うことにしたわけです。さらに、これに冷却材というものがあるのです。イギリスは炭酸ガスという、ビールのなかにでもあるありふれたガスを使うことにしたわけです（ガス冷却炉／マグノックス炉）。この燃料、減速材と冷却材の三つの組み合わせというものが、原子炉のいろいろのタイプ、形を規定するものです。

イギリスのコールダーホール型原子炉というのは、天然ウランニウムと炭素と炭酸ガスという最もありふれた材料ばかりで設計することにしたわけですが、これはわれわれ技術者から見ると、大変なことなのです。アメリカのように濃縮ウランニウムを使う場合なら、グラファイトでも楽です。またカナダのように、天然ウ

ランニウムを使っても重たい水を使うなら、これも余裕綽綽として設計はそんなにむずかしくはない。けれども、こんなコールダーホール型のような安物の材料ばかりを使って原子炉をつくるということは、これは大変な技術が必要とするのです。しかし、あえてそれをやってのけたわけです。それでちゃんと立派に電気をおこすようなところまで持っていたのです。これはえらいものだと思いますよ。

私は南極から帰ってきて間もなく、さきほどの原子力研究所に入ることになった。それから、イギリスへコールダーホール型をつくった技術者に会いに行きました。そしてその人たちに私はいいました。ほんとにアメリカやソビエツトのように、あるいはカナダのように、上等の材料ばかり使ってやるのは決してむずかしくはない。ちようど、学校卒業するのに、優等生で卒業するのは大したことないが、ギリギリで、まかり間違えば落第するところ、スーッと低空飛行で及第するのは大変むずかしい。あなたがた体験しているから知っているでしょうが、それと同じようなことが、イギリスの技術者によってなされたわけです。

それで、私はその人たちに会って、「いやあ、あなた方はえらい。よくやったなあ」といって絶賛をあげた。まかり間違えば、動かない原子炉になってしまう。ところがその技術者いわ

く、「いやあ、私たちがえらいのではありませんよ。私よりかもっとえらい人がおられます。それはSirと名のつく人です（何々卿、おじいさんです）。この人たちがえらいのだ」「それはどうしてですか」「いやあ、われわれがもぐもぐしていると、そのSirが出てきて、もし失敗しても心配するな。失敗は俺たちが引きうけてやるから、お前らは思う存分腕をふるえ、とい

ってくれた。これが一番大きな激励である。そのおかげで、私たちはもう一生懸命になって設計して、ようやくこれをつくりあげた」と、こういう話をしてくれました。それで、私は喜んで、「ほう、それでは」と、そのSirという人たちに会いに行きました。白髪のおじいさんです。「いやあ、あなた方がえらいんですってね。この若い人たち——若いといったらいい年ですが——が勇敢に設計することができたのは、ひとえにあなた方の激励によるものだそうです。えらいものですね」といいますと、Sirは「いや、いや。わしよりもっとえらい人がいる」といいますね。「は、それは誰ですか」「それはQueen、女王さんです。このSirをくれたのは女王さんです。だから女王さんのほうがえらいのです」といわれました。そこでわたしは「あ、そうですか。そんなら女王さんにいっぺん会いにつれていって下さい」といいますと、そのSirはいわく、「ははは、それは駄目。お前

はまた女王さんに会ったら、わしにいったと同じように、『あなたがえらいのだそうですね』というに決まっている。女王さんは、『いえいえ、私よりもっとえらい方がいらつしやいます』といわれるに決まっています。そうすると、『お前はすぐ』それはどなたですか』と聞くに決まっている。女王さんのいう答えももう決まっている。『それは国民でございます』と、こういうに決まっている。だから行く必要はないことは分かっている」とSirが私に説明してくれた。

このことは何でもないのでございますけれど、未知に挑戦しようとする人間に対しては、これほど大きな激励はないということです。つまり、うまく行かなかつたらどうしようか、心配だなあ、といつてへっぴり腰で逡巡しているそのときに「失敗のことなんか心配するな、失敗しても俺が引き受けてやる、とにかくお前は思う存分腕をふるえ」といつてもらえるほど有難いことはありませんよ。

ところが、日本のこのSirに該当する人たちはちようど一八〇度ちがいますね。私が原子力研究所に關係して、未来の原子炉はどういうものであるべきかということを勉強しました。そして、私を含めて六人が毎晩、東海村の寮に泊まって、お互いに検討会をやりました。昼間圖書を調べたり、計算機を動かしたりしてやって、

晩に集まってやる。その六人はもう寢食を忘れて、ほんとに楽しく、しかも熱心にやりました。そして私の案によるひとつの原子炉を設計しはじめたのです。それは世界でまだどこもやっていない種類の、高温度に使える高温原子炉でございます。それを設計して、そして論文をこしらえて、掛図をこしらえて、日本のSirに該当するおえら方のところを持つていったわけです。それで、私が盛んに説明すると、あとでそのおじいさん方は何とおっしゃったか。「ほう、西堀さんの話を聞いてみると、その原子炉はよっぽどいい原子炉と見えますね。しかし、そんないい原子炉ならとくの昔に外国がやっているはずだが、やっていないところを見ると、西堀さん、どこかにあなたの考えがぬけているところがあるのではないですか」とこうおっしゃる。これには私はもうガツクリしましたね。ともかく何かぬけるといのは、どこがぬけるとのか分らないですからね。ここがいけない、あそこがいけないとおっしゃるなら、私はいくらでも、そこがいけないならそうです、こうです、いくらでもいいますが、どこか知らないがぬけているのちがうかと、こういわれますとね、これは手も足も出ないですな。帰ってきてわが技術者の方々にそんなこといったら、かえって意気沮喪しますから、そんなことをいいません。ともかく皆、いい、いいといつ

て褒めておられたぞとね。しかし、こういうことも勉強してみようではないか、ああいうことももう少し調べてみようではないかということとは盛んにいった。そうしているうちに、だんだん日が経って、とうとう予算を提出すべき日を逸してしまつたわけです。と、もうその翌年にしか申請することはできないわけですね。チャンス逃がしたわけです。ちようどそれが八月の終わりです。で、九月に入りましたら、今度は第二回原子力国際会議がジュネーブで開かれました。私の同僚のほかの理事さんがその国際会議に出席された。そして私のところへ報告書が来ました。「西堀さん、あなたと同じ構想による原子炉を、イギリスが開発研究している。ドラゴン・プロジェクトといって、いまやっていることが分かりました。そして小さいながら模型まで陳列してあります」という報告書がきたわけです。それで私はその手紙をもつてさきほどのおえら方のところへ廻つて歩いた。「それ、ちらんなきい。英国はちゃんとやっています」。そして、そのときおえら方は「おう、やっているか。これはやつぱりいいものに見えるなあ。しかし、外国がやっていたなら、日本はやらなくてもいいな」。

日本のそういうおえら方と外国のおえら方のちがいがお分かりになりましたでしょうか。今日みたいに、こういう演題でしゃべっている

のです。未知に挑戦しようと思えば、そんな生ぬるい消極的なもの考えでは絶対駄目です。いかなる困難があっても、必ず克服してみせるという、強い強い意志がなくては駄目でしようね。

もうひとつ大事なことは、その意志だけでは駄目なのです。やはり勉強しなければいけない。まあ、自慢らしくいますけれども、私は暗記物が大変嫌いなのです。だから、そのおかげでといったほうがいいかも知れませんが、わずかの知識しかなくとも、そのわずかな知識をいかに上手に使うかという、応用の術というものを一生懸命になって勉強した。これは非常にいい。実はつい数週間前に京都で二人のノーベル受賞者と「故郷を語る」というか、京都出身者ばかりでありますので、話をきいた。と、そのときにその三人が異口同音にいったことは、子供のときは決してそんなえらく優秀な子供ではなかった。むしろ暗記物は皆嫌いだ。そういう話が出た。父兄の方が、PTAの方がたくさんいらつしやるものですから、私は「あなた方もご心配がなくなりましたねえ」と冗談をいった。あなた方のご子息も皆、ノーベル賞をとろうと思えばとれるようになるだろうということ。私がお原子力のことを始めたのは、実は南極で始めたのです。もちろんそれまでに物理や、電気だとか、原子力の理論などはよく存

じています。

ちょうど私が大学を出る時分に「書きかえられたる物理学」というものがあつた。いままでのニュートン力学では話にならない。だからここで、量子力学という新しい力学を出して、そして物理学が書きかえられた。アインシュタインの相対性原理なんていうものも、そのときに現れたわけです。で、ノーベル賞をとった湯川秀樹君や朝永振一郎君なども、量子力学の勉強を始めたわけです。アメリカのシカゴからラポルテという物理学者が来ました。これはごく若い人でございました。戦後になって、アメリカの大使館のアタッシェ(専門職員)になって来ていたことがあります。この人が量子力学の長期講義をしに京都大学に来たのです。私は化学に籍を置いておつたために、規則上、化学の人間が物理学のほうの講義を聴きに行くことはできないのです。ところが私はいまいった朝永君やらその連中とは親しいものですから、顔パスというものがありましてね。そして心臓とね。その二つありますから、ドアをあけて、「おい、俺も聴くぞ」といって中へ入って、それでガリ版ずりをもらって、そのラポルテの講義を私も一緒に聴きました。その中から二人のノーベル賞受賞者が、しかも量子力学において、理論物理学において出たわけです。その二名は、それから量子力学を発展させるために一生懸命

やった。いわゆるほんとの学者としてそれをやられました。しかし、私ははじめから態度がちがう。私は技術者になってその量子力学を使つてやろうと思つていますから、それを使うことができれば、それでいい。これが応用の才というものです。だから、私は量子力学のことも非常に知つています。原子力の話を聴いても驚きはしません。けれどもその後の原子力というものに離れていましたからね。

しかし、あの昭和基地には当時本はほとんどなかった。ただどうしても百科事典だけは持つていかないと困るというので、私は百科事典を持つていったわけです。しかも、それは平凡社の縮尺版でした。それが私のただひとつの知識のもです。知識は応用すると無限の価値が生まれますからね。

ちょうど私が南極にいるときに、茅誠司先生から、西堀君、ひとつ日本原子力研究所の理事になつてくれないか、という電報がきました。私は一体日本原子力研究所がどこなところだか、全然知らないわけです。浦島太郎みたいなものですから、どんなものか全然知らないわけです。そこで「ええ、茅先生のお好きなようにして下さい。帰りましたらあなたのいうとおりにしますから、おまかせいたします」という意味の電報をうったわけです。それから間もなく先生から、お前が帰つたら原子力研究所の理事

になるよう皆に相談したら、おゆるしが得られたので、お前自身のいわゆる承諾書というものを送れ、という電報がきた。で、私は早速筆で、私儀この度……なんて書いてそれで通信士の佐久間君に「おいこれを写真電送で送ってくれ」。写真電送の機械があるのですから、その機械で送ってくれ、といった。その通信士は、「あ、これは公用ですか、私用ですか」というのです。「それは分からない。もし相手の機関が政府の機関ならそれは公用だし、もしそれが私企業であればそれは私用だね」「それは困ります。この電送の機械は私用には絶対使ったらいかと、隊長がいったではありませんか。それにどちらか分からないようなものを出すわけには行きません。隊長がその規則をやぶるというのはよくない」「こういのです。「ほほう。それはまあそうだな。ならやめておこう」。今度は片仮名で「ワタクシハ……」と書いてね、出したわけです。で、それが効果があったかどうか知りませんが、ともかくそういうことがあって以来、さあ、試験勉強、あなた方の得意なやつ。百科事典をずーっとめくって、およそ原子力について書いてあることは全部勉強した。けれどもたかが百科事典、これは、どなただって勉強しようと思えばできる材料です。それだけの材料をたくみに使いますとね、新しい原子炉の設計が出来るくらいです。だか

ら、皆さん方、必ず知識がなくてはいけませんけれども、ただむやみと知識の量が多いだけが能ではない。いかに上手に使うかということが、未知を克服し挑戦するうえで非常に大切なことである、と申し上げておきたい。

私は小さい時分から、技術者になってやろうと思った。それが湯川君や朝永君と私とのちがうところなのです。自慢して言っているのですよ。ともかく学者というのはね、錐でついたように、何かひとつぐーっとやっておればそれで学者になれるのです。しかし技術者になるためには、いま申したように知識の幅がなければならぬ。なんでも知っているように、そのわずかであるかも知れない知識を、十二分に活用できるような応用の才を持っていなければならぬのです。

私は子供のときに、人間は何のために生まれてきたのかと、自問自答したことがあります。その結論として、人間は経験を積むために生まれてきたのだ。この七十歳の老人になるまで、いまなおその精神というか気持というのはなくなっていますね。どんなことがあっても、何でもやってやろうという気持がなければ駄目です。応用の才というのは、私は子供のときにロビンソン・クルーソーの話を読みました。彼がそこにある事物を使って自分の生活をうまくするためにありとあらゆることを考えた

のと同じようなことを、知識の上でやればいいのです。

で、それがために、私は大学へ入るときに、どうせ大学へ行ってからあれもこれもみんなやらなければならぬのですから、何からやっただって同じこと、どうせ皆やらねばならない、こう思っていたわけです。で、大学に入るときに、どこの科を受けてやろうかなあと思っただけです。

私は、一方で山登りが好きなものですから、日本で富士山の次に高い山、あの南アルプスの白根三山のひとつ、北岳、これをまだ誰も冬にスキーで登った人はなかったのです。よおし、こいつの初登攀やってやろうと、こう思ってた。随分昔の話ですよ。ところがちょうどその時期は大学の入学試験のある時期です。すると、入学試験受けたら山へ行かれません。山へ行ったら入学試験受けられませんしね。弱ったなあ、とこう思って。私はいつでもこれかあれかというものがあつたら、必ずこれもあれもできないかと考えてみることにしているわけです。大学か山かと、こうなってきた。両方行けるようにしたらいいではないか、と。これから試験のないであろう科目をさがすことにしたわけですね。そしてそのヤマをあてたわけです。ほんとの山も登ったのです。初登攀。そのときに桑原武夫君も私の一隊員でありましたが、私はリー

ダーをしていました。彼は隊員でした。そして帰って見たら、大学の試験もちようどないというところが分かりました。両方の山が当たった。だからこれもあれも出来たわけです。

こういうふうにして、私は大学に入ったのですけれど、さきほどいったように量子力学の勉強もしましたし、電気の勉強もしました。何でもやりました。もっと大事なことは、私は高等学校のときに、昔は理科と文科に分かれておりまして私は理科なのですが、その理科の中もお医者になる人と工学部に行く人とに分かれている。で、私は当然工学部に行くべき人間ですけれども、こんなものはあとになっていやでもやらなければならないのだから生物のほうへ行ってやろうと思つて、それで私はお医者さんたちの行く生物のほうへ行った。蛙の解剖したり兎の解剖したわけです。これは非常に得しましたね。ともかく私の解剖した兎が、雌だったか雄だったか分からずじまいですけれど、それでも大変得しました。それでいて、自分は製図とかそれから力学というようなものは、独学したわけです。だから製図はものすごく好きであり、上手なのです。

取越し苦労するとか、あるいはそういう骨折り損というのは嫌だとか、そういう気持というものがあるのも一歩いけぬ。大体そういう取越し苦労したり、骨折り損ということをいったりする人というのは、その結果だけをねらっていて、その途中というものは問題にしないからです。山に登るときにただ頂上へだけを念願していると、途中まで来てみたら、嵐がきて帰らなければならぬことになって、「ああ、骨折り損だったなあ」と、こうなるわけです。私はそうではなくて途中を楽しむ、やっているその最中、結果でなく最中を。それは鳥も鳴いている、景色もいい。それであわよくば頂上に行けたらもつきの幸いと考えたらいい。そしたら決して骨折り損にはならない、骨折り得になった。そういう考え方でなかつたら、とても未知には挑戦できませんよ。

去年の二月から六月まで、私はヒマラヤへ登つてきた。私の行った山はヤルン・カン。やるんかやるんのか、どつちか。やるんですよ。高さ八五〇〇メートル、マナスルよりか四五〇メートルも高い山ですよ。世界で五番目に高い山です。そのリーダーをして、三か月半山の中で生活していました。まあ若い人ならいざ知らず、そういう生活はなにか肉体的にこたえませんでした。そのときの話を少ししましょうか。

ネパールの東の端に、カンチェンジュンガと

いう、世界で三番目に高い山があります。この山をダージリンというところから見た景色は、世界で最も立派なヒマラヤの景色で、あなた方の習った地理の本には、ここからカンチェンジュンガを見たものが、ヒマラヤの写真として出ているはずですよ。

ヤルン・カンという山は、そのかげにかくれておつたために、存在がみつからなかった。そこへ私たちの植物学者の中尾佐助という人が、その近くへ行った。そしてこの山をみつけてきた。

この辺はちようど外国人立ち入り禁止区域になつている。チベットと印度とネパール、この三つの国境ですから。こんなところへの立ち入りを許可することはできないということでありましたが、それであきらめたらおしまい。それから執念深く毎年毎年申請書を出しておりましたが、いつでもなしのつぶで駄目でした。ところが、一昨年の秋に突然許可書がきたわけです。こちらのほうが驚いたくらいです。その後しばらくたつたら、正式の許可証がきました。で、その許可証を持って、東京の私のうちに来ました。「西堀先輩、なんとかまたあなたのお顔をもう一度貸してもらえませんか」「どうするのですか」「いや、実はね。折角許可証はきましたけれども、もう間に合いません。いまから準備をしるよといったって、それはでき

ない。この許可証をもう一年先に延ばしてもらおうように、ひとつなんとか交渉して頂けませんでしょうか」「馬鹿野郎、何をいうか」。だが、それから後はモンズーンといって季節風がでて雨季に入ります。あなた方、ヒマラヤの雪はいつ降ると思えますか。夏ですよ。ヒマラヤの雪は夏降るのです。冬は寒い。それは寒い。けれども乾燥してますからね。雪は降らないのです。むしろ雨季のときは湿度が高くなって、雨や雪が降るわけです。それはヒマラヤの高いところでは、それは全部雪になるのですね。だから五月の終わりまでに登ってしまわなかつたら、もう登れない。

それからずつと逆算して行くと、どうしても十二月の終わりには荷物を船出しなければならぬ。と、それまであと二か月しかない。まだお金は一文もない。これからお金を集めて品物を注文して荷造りして出すなんて、それはとても出来ません。不可能です。不可能です、その若い人はいいました。で、私は「さきほどからお前の話を聞いてると、不可能だ不可能だといっている。おそらくそれは常識的に考えて不可能だといっているのだね。それなら非常識でやりなさい。そしたら、不可能は可能になるのだね。だから非常識にやりたまえ」「ああそうですか。非常識ね。ああ、そうですか。はい

はい」といって、その男は京都へ帰ってしまいました。

それから数日たちましたら、今西錦司博士という学者——この人は私の昔からの親しい人で、日本山岳会の会長をします——この人から電話がかかってきた。京都からね、しかも夜中に。「西堀さん、すまないけれどね、どうしてもこのヤルン・カンの遠征隊の隊長になって、あんたに行ってもらわないとどうにもならない。頼む、頼む、頼む。行ってくれ、頼む、頼む、頼む」「そんな無茶言ったって、それは駄目だよ。突然そんなことをいったって、それは不可能だ」といいました。「君は若い人に、不可能を可能にするには非常識にやれといったではないか。西堀、すまないけれど君ひとつ非常識にやってくれ。頼む、頼む」。

さて、自分のことになってくると、そう簡単には行きませんね。しかし、常識的に考えたらどういうことにするのだろう。まず女房によく相談してから決めるよ、なんていうのが、これまず常識的でしょうね。そんなこととしてごらんください。それは絶対駄目です。もう女房は何というか。「あなたおいくつ」から始まって、「そのお齡で、いまさらヒマラヤとはなんですか。およしなさいよ」なんていわれると、「うんそうだな。それではやめておこうか」というようなことになるのが、これ常識的ですね。非常識

なんていうのはどういのかというと、そんなことはしないで、いきなり「もうそんなら行くぞ」といってしまったらそれでよい。

まあ、そういうことで行くことになったのですけれども、さあそれから準備するのは非常識に自分でやらねばならないことになったわけですから、随分やりました、いまから考えると。決して罪つくつたり、悪いことはしません。けれど人間というものは頭の使い方ひとつなのです。知恵の使い方ひとつなのです。ともかく十二月末日までにはピシヤツと準備ができました。

こんなことは、登山史上めつたにない出来事です。奇蹟的な出来事です。二か月であれだけ山に登る準備が全部整ったというのはね。それでいて致命的な大きな忘れ物は向こうへ行ってみたら、何ひとつありませんでした。しかし、小さいものはいっぱいありました。

まあ、そういうわけで準備は整いました。いよいよ出発する直前になりましたときに、壮行会というのがおこなわれました。で、桑原武夫君がまず立って、「この度、西堀君に行つてもらうようにお願いしたところが、彼は快く引き受けてくれました——私としては少しも『快く』ではないのですが——。しかし、なんといつても彼は齡七十歳の老人で、体力的には全然駄目に決まっております、大勢の若い人には迷惑を

かけ、手足まといになることは決まっているけれど、いつてみれば連隊旗みたいなものだ」。

皆さん、連隊旗は「存じないかも知れませんが、戦争中にですね、なにか弾のあとといった感じで紐だか旗だか分からないような連隊の旗があるわけです。そんなもの持つて戦場に行ったところで、糞の役にも立たない。唯物論的に考えたら、こんなものは何の価値もありませんね。そんな邪魔になるもの捨ててしまえ、といったってとおるのですけれど。さあ、しかし、そこにいわゆるいいがたき値打ちがあるわけです。そのためにも老人の私がでかけていくことになるのです。うまいこといったなあ、と思ったわけですけど、まあしかし、連隊旗を大事にしないさいよ、と皆いつてくれましたので、少し安心いたしました。

さて、いよいよ私が挨拶をしなければならぬのですけれども、一体、私は何のために行くのか分からないのです、正直な話。それはなるほど私の名前で申請書が出ておりますから、それは私が行かないと、ネパール政府に対する顔は具合悪いでしょうね。

さきほどいいましたように、この計画は十年前に立てられた計画でありまして、当時中心人物であった人は血気盛んな皆さんのような若者であったのですよ。だからそういう人たちはこの八五〇メートルのこの山へ登るのに実

にふさわしい人たちであったのですけれども、十年たつたらもう大変ちがいますよ。当時独身だった人も、まもなく結婚したであろう。結婚したら子供が出来るでしょう。十年たつたらその子供は小学校に行っているのですよ。だから、いま小学校へ行く子供のオトツチャンどもが、中心人物です。大変なちがいです。それにいまさら私が「危ないから気をつけなさいよ」そんな馬鹿なこといえますか。そんなこといいにくいなら私は行きません。馬鹿らしくて。むしろ

そういうふうな人は十年たつて若年寄になっているのです。だからこの八五〇メートルの山に登るのに、もつともものすごいファイトが必要になる。にもかかわらず、そういう人が若年寄になってへっぴり腰になっていたら、全然駄目なのです。だから、その人たちを激励しに行くのだつたら、私が行く価値はあるでしょうね。しかし、激励して何をするかたなんでしょう。野球の応援団みたいに太鼓叩いて「頑張れ、頑張れ」といったらいいというなら、そんな馬鹿なこと、何の価値もない。さあ、そこで思い出したのがさきほどのイギリスの Sir というおじいちゃんのことです。これが大事なんです。これは非常な激励です。で、私は早速挨拶し、「この度私は隊長に選ばれました。選ばれた以上は、私は立派に隊長らしくやらして頂きます。もうケチケチしたことはないません。隊長であ

る以上、外に向かつては絶対の責任がございませぬ。いかなる事件が隊の中で起こりましようとも、私は責任をとります。だから、諸君、あなた方は失敗するなど、考えなくていい。思う存分腕をふるって下さい。——足かも知れないけれどね。——」そういったわけです。

で、私たちの共同の目的っていうのは何だったといったら、誰かを頂上に立てることですよ。誰かが頂上に立てたら、全員登ったと同じです。ひとかたまりになって一体感で物事をやるということは、チーム・ワークの一番大事な基本的なことです。皆さん方スポーツをやります。そのときに俺たちの共同の目的とは、今度の試合に勝つことなんだと。皆やって勝とうよ、そういう気持というものが一体感なのです。だから、誰がフットボール・トライしようとかまわぬ、勝つのです。それと同じように、誰かが頂上に立つたら、それで全員登ったことになる。ところがね、外国はちがう。誰かが頂上に立つても、その翌日いい天気になれば、俺も行く。その翌々日コンディションがよかつたら、俺も行く、俺もわれもと行く。これは個人主義。一体感がないのです。私たちの場合は一体感で行きましょう。その代わり、ネパール人もわれわれと一緒に。皆ひとかたまりになってやる。これは非常によかつたと思います。それが私の挨拶で、いよいよ出発することになったわけで

す。

はじめはカトマンズぐらいのところまで帰ろうかと思っていたのですけれど、お守りさんだ、連隊旗だつていられると、そんなものはさつさと帰るわけには行かないわけです。だから、まあ交通機関の最終点ぐらいいまでなら何とかゆけるので、ダランバサルというところまで行くつもりになっていたのですよ。そしてそこへ行ったら、隊員の一人が、「隊長、馬が用意してあります」「それはウマい話だな」。

馬、馬といつてもたった二頭しかないので、私だけに乗るわけです。しかし、私が乗ると、三蔵法師みたいなものです。村の中を、カッポカッポ歩いていきますと、まわりに孫悟空どもがちゃんというわけですね。そうして村の人は手を合わしてちゃんと拝むわけです。これは、ネパールでは、ヒンズー教で、帽子ぬいで「やあ、今日は」というのとちょうど同じぐらい気軽な挨拶なんです。ですけれど、私といたしましては、こうやられると、村の中を歩いてるとき実に優越感を持ってカッポカッポと行くのですがね。

さて、いよいよ山にかかりましたらね、馬子が、「隊長ちよつと降りて下さい」「降りるとは、どういうわけだ」「これから先は道がものすごく悪いですから、馬ささちよつと困る」「しようがない」。ひどい道です。だいたいネパール

なんて、ジグザグの道なんてひとつもないので、まっすぐにぐーと登ってぐーと降りるので、これは足で歩く場合の最も能率的な行き方ですからね。そうして、諸君はネパールのご存じかどうか知りませんが、山のてっぺんまで畑を耕してある。誰かがそれを見て、ははあ、耕して天に到る。なかなか勤勉な国民だなあ、と。それはそれとおりの勤勉は勤勉ですけども、それは間違いなのです。耕して天に到るのではなくて、耕して谷に到るといわなくてはならない。生活の根拠は皆骨折りのなです。だんだん耕して下に降りてきた。耕して天に到るでなくて、谷に到る。ここはもう椰子の木が生えるぐらい熱帯なんです。ここに吊り橋がかかっている。ぐーと登ってぐーと降りて、また吊り橋を渡って、ぐーと登るのでね。

だいたい私たち、この村があるところでは、村のそばにテントを張る。ですからまた朝になるとぐーと降りてぐーとあがる。一〇〇〇メートルもあつて大変ですよ。そうしてそういうことをしながら、二十日間かかってやつとツエラムという森林限界——これから上は木はない——そこへ二十日目に着いたわけです。考えて下さい。この老人がね。道の悪いところだけ歩かされて、どうでもよいところは馬に乗って、まるで馬に乗っているといふようだけれど、いいところだけ乗って、あとはみんな歩かされて

いるのですから、実に割りが悪いですね。

さあ、このツエラムについてみたら、そこはまだ雪がいっぱいありました。その雪の上に芝を刈ってテントを張りました。そしてそこで三か月半生活したのです。この生活はきついですよ。南極と比べたら、もうはるかにきついですよ。南極はなんといったって、あのプレハブの家ですからね。断熱材が入ってますから、それで部屋の中は十五度にちゃんと自動調節がしてありますから、外が寒かろうが暑かろうが、中はきわめて快適です。

ところがね、ツエラムのテント生活、ここは高さ四〇〇メートルですが、晩は南極なみの寒さですよ。昼間は、熱帯ですからね。すぐ裸になりたいくらい暑いですから。そうすると、あの薄っぺらなテント一枚。朝起きたら枕元の水が氷ついている。ちよつと焼き入れしているようなものでね。これはたまつたものではない。りませんよ。で、芝の上に寝ているのですから、決して楽ではありませんね。食物はといたら、南極では冷凍品といえども、ともかくご馳走を食べています。ところが、今度われわれが行ったところは、羊です。羊というものは、いいですよ。肉が足をつけて勝手に歩いているのですから。肉が足をつけて勝手に歩いているのですから。越え山越えしてついて歩いていられるのですから、その間濃厚飼料というか、いい食べ物は何も食

わざずにやってきているから、もうツェラムに
ついたときは、骨と皮になっていくわけです。

それを一刀のもとにザーと首をおとして、ま
あ食うのですけれどね。入れ歯では絶対食えま
せん。若い人はうまい、うまいと食ってますけ
れどね。私など絶対食えません。ところが、ま
あよくしたもので、ちゃんと脳味噌とか肝臓な
んでいうのは柔らかいですね。これは、「隊長
特別料理」。特別料理なんていうと、いいよう
にあなたがたは思われるかも知れないが、朝も
昼も晩もそればかりです。このような生活を
臥薪嘗胆というのです。あんな生活は他人の命
令でやらされると思ったら、一日もいらませ
んよ。自分でやっていると思うからこそいいの
です、楽しんでるのです。私は、だから精神
的には何ひとつ苦痛を感じたことはなかった。
だけれど、生理的にはぐんぐん体の目方が減っ
ているんですね。三か月風呂にいつペンも入り
ませんでしたからね。だけれど、裸体になって
拭くと、昼間暖かいときに拭いたのですが、足
を見たらまあなんと細くなっているなあと思
ってびっくりしました。ズボンのバンドを、穴
五つずらさねばなりませんでした。十キロ目方
が減っていました。その代わりね、体が軽くな
ってるからね、もう敏捷なのだ。岩の上なんか
歩くとき、仙人が歩いてるみたい。

何でもかんでも、いいほうにいいほうにとる

ようになっていきますから、やせていることでも
なんでも苦にしませんよ。はあ、これで体が軽
くなった。岩の上を歩くのが楽になったと、こ
う思っておればよいのです。横には氷河がごう
ごうとね、氷河の滝が地響きたてて流れている。
これももし騒音公害なんていいでしたら、あんな
などこ一日もいらはしません。だけれど「ほ
ほう、風流な音だなあ」と。

まあ、その生活は大変楽しい生活でありま
した。私が行ったときにはまだおりませんでし
たけれど、それから間もなく犛牛（ヤク）とい
うけだものをつれてきた。放牧にしたのをずつ
と下の村からつれてきた。この犛牛というやつ
は、牛よりかひとまわり大きいみたいなやつで
立派な角ですね。そして毛が長くてね。地べた
につくぐらい毛が長いのです。そういうやつが
最盛期には千頭ぐらいわれわれのまわりにい
ましたよ。ひどい急斜面のところに。この犛牛
番の生活というのは、全部犛牛を中心にしてい
ますから、着るものから、テントから、ロープ
から全部犛牛の毛ですね。そういうやつがいっ
ぱいいました。ところがひまなものですから、
私らのところへ遊びにくるわけです。当時ツェ
ラムにはわれわれはたった四人しかいない。他
の隊員は皆上にあがっています。そして日本人
は私一人です。あとはネパール将校が一人、そ
れからキッチン・ボーイといって私の食事をこ

しらえてくれるやつが一人と、十三歳の少年。
これは馬子の子ですが、この四人で住んでいた
のです。そこへ犛牛番が遊びにくるわけです。
しかし、この、犛牛番というやつは無学文盲で、
学問はなんにもない人だけれども、純粹な人間
であります。猿でない、雪男とちがう。非常に
正直で、勤勉で、驚くべきです。悪いことは全
然知らないね。

ある日のこと、薪を背負っていた。さてはこ
の薪を売りにきたのだと私は思ったわけです。
それでネパール将校をつかまえて、「おい、あ
れいくらで売るといつているのか」ときいたわ
けです。「ただです」「ただ、それはどういうわ
けだ」「ここへ来て焚火にあたらせてもらって
いますので、だから、お札に薪を今日は持つて
きました。はあ、感心した。それならまあ、
私は金をやるというて金をやろうとした。もし
たら、ネパール将校が、「待って下さい。そん
なことにあんたが金をやったら、その人に悪い
ことを教える」「では、どうしたらよい」「あん
たがほんとに感謝していることを表わせばよ
い」というのです。「だから、金をやるといっ
たのだ」「金以外のものでやりなさい。もので
なしになにかあんたのほんとうの真心で感謝
したらいい」と、こういうのです。私もどうし
たらよいか分らないけれど、とにかく「ど
うもありがとう」といって、そいつの手を握っ

て握手した。両方の手で握手した。そしたら、彼は涙をポロポロとこぼした。それを見ていた私が、またポロポロ。これでいい。人間というのはこれでいい。

まだそのほかいろいろありますが、時間がありませんから、それは省略して、いよいよこれからツエラムからベース・キャンプ、それから第一キャンプ、第二キャンプとずーっとあつて頂上は第六キャンプからあがる。それで、そのツエラムからここまで四日間かかるわけですが、私はその間は氷河の上を歩くのですけれども、これがまたひどいものです。これはもの比にあらず。

もう私の体力の限界をはるかに越しています。なるほど仙人みたいに体は軽くなってはいませんがね、たくわえがない、貯金がないものですから、すぐエンストを起こしてしまう。仕方がないから、蜂蜜の入った水を用意してございまして、エンストを起こすと、ガソリンがわりにそれをガブツガブツと飲んでですね、またエンジンを動かしていくでしょう。またエンスト、また飲む。

いやまあ、この旅行のつらかったこと、もういよいよベース・キャンプに近づいたときなんか、全く。

しかし、そのとき初めて、この「必死」という言葉がどういうことを意味しているかとい

うことが分かりました。必ず死ななければいけないのですからね。生きている間は歩かなければならないのですから。いよいよ歩けないときに、「こらっ、お前はまだ生きているではないか」と自分をしかりとばす。そしてまた歩く。また「こらっ、まだ生きているではないか」と自分でしかつて、また歩く。ほんとにね。必死ということがほんとに怖いものであるということが分かりましたよ。日頃俺は必死になつて麻雀やつているぞなんて、それはね、いいかげんなものですよ。

で、ようやくベース・キャンプに到着いたしましたときは、ここに樋口教授という登攀隊長がいました。これが強力な望遠鏡を持ってきていました。で、それでのぞきながら、無線でもって右行け左行けといつて行くのです。そうでなかつたら、氷がいっぱいあつてね。バーム・クーヘンというお菓子があつてでしょ。あれとおんなじような氷があるわけですよ。そのひとつひとつに年輪みたいなのが、これ夏降つた雪と冬とでなるわけです。そういうのが切りたつた壁がありますし、どこを通つてよいか全然分からないです。

で、こっちから見て、もうちよつと、こっちがいいぞ、あつちがいいぞ、あすこで梯子をかける、そこへ第一キャンプ、第二キャンプ。だんだん進んでいくのです。

実に樋口隊長の説明によりますと、もうコンピュータで計算したように、ドンピシャと計画ができていますね。だから私は大変安心して、「うーん、よし。これで安心した。よし、君にまかせ。それでは私は帰る」といつて、帰つてきたのです。

しかし、帰りがけに、私がいつたことは、「お前のやつたこの計画というものは実にうまく出来ているけれども、これは全部ロジックでつくつたものである。つまり、こうだからああ、ああだからこうというので、こしらえた計画、これは、非常にいいですけども、決して完全には行かないよ。これは思いもよつていないことしか考えに入れられない。思いもよらないことが起こるかも知れない。思いもよらないことがあるかも知れない。必ずある。未知を克服する上においては、常にそういう思いもよらぬことが必ず起こつてくる。そのときにどういう臨機応変の処置を講ずるかということが、未知に挑戦する人間に最も必要なのです。つまり、そのときにあわてふためいたら、絶対駄目です。必ず失敗は大きくなる。だからですね、あわてふためかないで、沈着に落ちてあたかも平常あるがごとき姿で、その平常心を持っていかなければ駄目だ。これが大事だぞ。必ず思いもよらぬことが起こるといふことを覚悟していなさいよ。そして、思いもよらぬことが現われた

ら、それ思っていたとおりと、平常な気持でやれ。これがね、未知に挑戦する一番大事な秘訣なのです」。そう教えておいて、私はツェラムに戻ってきたのです。

それで無線電信でもって盛んにやるのですけれど、無線の機械が故障を起こしましてね、受信機がこわれたのです。で、隊の中では受信することはできませんでした。しかし、日本へは楽に交信できました。日本から入ってくる通信なんか、私の息子たちの声が、ちゃんと山の中で聞こえているのですよ。そのぐらいよく聞こえました。

「とうとう思いもよらぬことのために、第六キヤンプというものをつくることができない。その代わりに、ここにデポ（※登山時、あとあと回収・使用するために荷物を行程の途中に置いておくこと。またその荷物・地点のこと）というものをこしらえた。そこに酸素置き場をこしらえて、頂上に二人の隊員が進んでまいりました。

幸いにしてその二人の隊員はこの八五〇〇メートルの頂上に立つことが出来たわけです。これは歴史の中でね、きわめて稀なことですよ。いきなりやって、その年に登れたという例はきわめて少ない。マナスルだって四年目ですよ。ヤルン・カンより四五〇メートルも低い山でありながら、四年目にしてようやく頂上に立てた

のですから。われわれは一発で、ズバツとやれた。

だが、大変な出来事になった。それは無線の機械の故障です。多分空電（※雷や雲間放電などによって大気中に生じる電磁波。無線受信の際に妨害雑音となる）のためでしょうね。それがために頂上に登った連中との間に、音信不通になってしまった。さあ、どうしているか分からない。そのうちに晩になりました。しかし、幸い月は皓々と照って静かな日でありました。で、無線の交信がないので心配しておりましたら、翌日の朝六時十五分ぐらいに二人の隊員が、このデポめがけて歩いてるのが見えた。

ああ、まあよかつたなあと思っているうちに、そのうちの一人が動けないようになった。もうあと五十メートル行ったらデポがあるところまで行っていないが。それでもう一人の男がだんだん近づいて、もうあと二十メートル下へ降りれば、その酸素の置いてあるところに行きつくのには、どんどん上へあがっていくのですね。ああ、ちがうよ。お前、下へさがれ、下へさがれと無線で一生懸命いうのだけれども、無線は故障起こしているのだから通じないわけです。とうとう、その男はドンドコ、ドンドコ上へあがってしまいましたね、とうとう彼自身も動けなくなりました。救援隊がすぐ走りました。走るつたつて走れはしませんが、救援隊がそこ

へ行きつくまでに七時間かかるのです。七時間かかってようやく、その上へあがってきた男——これは上田（あげた）という名前なのです——その上田君のところへ酸素を持っていったら、彼はスーと酸素を吸ったら一気にワーツと元気になったですね。で、もう一人の松田という隊員のところへ探しにいったけど、いたはずのところにはいないのですね。そうして下の方に折れたピッケルが落ちていた。これで一人の生命を失ったわけです。おそらく酸素を失ってきますと、意識が朦朧としてくるわけです。で、その朦朧としてるところへ急斜面ですからね、フラフラツとしたら、バサツと落ちてしまいうわけです。

まあ大変な不幸な出来事が起きてしまった。まあ、隊長としてですよ。いかなる事件が起こっても、俺が責任を負うと、出がけにあんなにいったけれども、さて責任をとるとはどういうことをすることか。分らない。お釈迦さんがやったとおんなじように、瞑想に耽つてみただけれど、一向どうも邪念が多くて、悟りを開けませんでしたかね。ついに今日まで分かりません。まあ、これだけは分かった。それは、とりあえず反省することである、と。

で、早速、私は隊員全員を集めて反省会をやりました。そしてまたその反省会を開いて、ほかの人たちの批判も受けました。結局、その隊

員の死んだということから得られる、あらゆる教訓を学びとうと努力したわけです。言い方を変えれば、失敗に学ぶ姿勢というものを実行に移したわけです。

で、いろんなことが分かりました。まあ、これも時間がありませんかから十分に申し上げられませんが、これもひとつだけ申し上げますと、隊員のそのベース・キャンプを預かっている人、責任者、その人に私は、「まかします。よしまかした。しっかりやれ」といつて帰ってきましてけれども、あとから振り返ってみると、「まかした、まかした」といつていながら、結局放任していたことになりました。

放任は罪悪である。これは諸君がこれから人生の長い歩みを歩まれるときに、必ず遭遇するであろうことでもありますから、よく覚えておいて下さい。

あなたがその問題について強い強い関心を持つていたら、必ずあなたにも何ものかインスピレーションなり、暗示があります。その暗示というものによって相手に刺激を与えなければいけないはずです。もつといい方を変えれば、強い強い関心を持って常に「陰ながら」見守っていなければいけない。それをしないで、ただまかしてしまうのであれば、それは放任というものである。

まあ、これから皆さん方にはいろんな意味で

未知の世界に入っていくて頂かなければならない。今日はそういう意味で、まあ未知を克服する、未知に挑戦する心がまえみたいなものを申し上げたつもりです。

皆さん、まだ私の年齢に達するまでには、長い長い人生があります。このじじいでも、いままなお夢を持ちつづけております。このじじいのやることを見守って頂きたい。強い関心を持つて見守ってほしい。

まあ、そのうちに私のヨットが出来ます。そのヨットの名前は「ヤルン・カン」。昨日も日曜日に乗ってきました。自分でつくって、三年がかりですよ。これも夢のひとつです。

まあ、そんなデカイのを諸君につくれとはいいませんけれども、そのぐらいの夢はいくらでも持ち得るはずだと、私は思います。

まあ、ひとつ長い人生のために、夢をお持ちなさい。では私の話を終わります。(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。